

地域との連携や協働を通して学ぶ ～保育・幼児教育を学ぶ学生だからこそその学び～

差波 直樹

要約 教育において、地域との連携や地域での教育活動の意義が言われるようになって久しい。それは、本学のような短大での教育においても、あるいは本学の学生がやがて保育者となって展開する幼児教育においても同じである。その重要性や意義について十分踏まえながら、実際に地域の子育て支援団体との連携や協働を展開し、そこで学生たちが実感したこと、学びとして感じたことなどを探ったり考えたりしながら、地域をフィールドにした教育研究活動の意義について明らかにしていくものである。

1. はじめに～研究の目的

本学幼児保育学科においては、「愛と知性に富み、常に自らの専門性の向上を目指す保育者を育成する。」ことを教育理念に掲げ、保育者の養成に取り組んでいる。この理念においては、他の保育者養成校の教育理念と大きく変わるものではない。

本学では、この教育理念に基づき、年度ごとに事業の重点目標が掲げられている。2021年度のその第2には、「地域貢献活動や地域をフィールドとした教育研究活動を推進し、その成果を地域に発信する。」と示されている。この重点目標については、文言を少しずつ変えながらではあるが、本学において数年に渡って継続して掲げられている。そして、この目標に沿って日々の教育活動が展開され、そのことが他校とは一線を画した本学の特長の一つとなっている。

その教育活動の一つが、ゼミナールである。各ゼミナールにおいては、その担当教員の専門性に基づいた、かつ、幼児教育・保育に関わるテーマが設定され、学生が能動的に学びを進める講義が展開されている。また、地域社会の要請に応じて、このゼミナールでの学びを発揮する場面も多い。

筆者が担当するゼミナールにおいては、自分の責任で自由に遊ぶことができる遊び場、プレーパークの活動（差波ゼミで行うその活動の名称を1Park(わんぱーく)と称している。以下、わんぱーくと表記する。）を地域の中で展開することを主な取組としている。平成27年度に始めたこの活動を、八戸地域で継続して展開してきた。この間、県

内他地域のプレーパーク活動団体と連携をしつつ、プレーパークの意義の発信も行ってきた。その成果もあり、地域の様々な子育て支援の団体やグループから、わんぱーくの活動展開の要請や、共催の依頼を受けるようになってきたところである。

さて、こうした地域社会からの要請を受け、協働を展開しているが、その意義や成果、価値や恩恵を得ているのは誰だろうか。

一つは、この活動に参加する子どもたちや保護者である。自分の責任で自由に遊ぶことを通して、子どもたちはその充実感や楽しさを実感している。保護者も、そうした子どもたちの姿を見たり、一緒に遊びの楽しさを共有したりすることで、子育ての楽しさを感じられるだろう。二つ目に、協働している子育て支援の他団体である。それぞれの団体が目指す子育て支援の在り方やその展開の一助に、このゼミナールの学生の活動が成り得ている。そして最後に、活動の当事者である学生たちである。

この学生たちが、地域の様々な機関や団体との、子育てや子育て支援に関わる協働を通して得ているのは、どのようなことだろうか。この活動を起案し、展開できるようにしてきた教員としては、こうしたことが得られるのではないか、という思惑はある。しかしながら、実際にその活動の中で、学生たちが素直に感じていることや、学びとして得ていると感じられることはどのようなことかを探ることがまず一つ目の目的である。

さらに、そのことが、保育者を目指す学生である

からこそ得ているものであることもあったと想像され、それらを詳らかに捉えていきたい。

これらを通して、本学の目指す地域貢献活動が、地域に貢献するだけでなく、学生自身の学びにも直結しているという両義性を確認し、その意義について主張することをこの研究の最終的な目的とする。

2. 研究の方法

(1) わんぱく一歳の活動の展開と振り返り

わんぱく一歳の活動を、地域の子育て支援団体と協力して展開し、その振り返りを学生と行う。

開始時と、年間の活動終了時に KJ 法を用いた学生のディスカッションを行い、その結果をもとに考察する。

(2) 学生へのインタビュー

(1)のディスカッションをもとに、さらに詳細について個別にインタビューを行い、その結果を分析し考察を行う。

3. わんぱく一歳の活動と地域の子育て支援団体との協働について

(1) 「Papamama ふあいと八戸エリア」での動画制作・配信

パパママふあいと協会は、八戸地域において、子育てと親の学びを支援することを目的に設置された任意団体である。

この団体が運営するホームページ、「Papamama フェイト八戸エリア」が 2021 年度にリニューアルされることになった。そのコンテンツの一つとして、子育てや遊び、保育者を目指す短大学生の日常などを動画で配信する要請を受けた。

2021 年度は、地域の公園や親子で楽しむことのできる遊びの紹介、短大での学びの様子、地域で子育て支援に携わる人々へのインタビューなどの動画を 12 本制作し、配信した。

(2) 「遊 Viva!熊ノ沢ワンパーク推進委員会」との協働

遊 Viva!熊ノ沢ワンパーク推進委員会（以下、熊ノ沢委と表記）は、2020 年度に設立された任意団

体で、八戸市の尻内地区における子育て支援を主な目的としている。

その子育て支援の取組の一つとして、プレーパークの活動の展開を掲げ、わんぱく一歳と共同開催をしたい旨の要請があった。

2021 年度は、尻内地区にあるフラット八戸やその前の公園を会場に 2 回実施した。

(3) 「星のあそび塾」との協働

星のあそび塾は、特定非営利活動法人 星ノ池が遊び場の提供を通して子育て支援をする取組である。

わんぱく一歳の取組やその理念と重なる部分が多く、共催の要請があった。2021 年度は 3 回実施する計画が立てられた。1 回実施し、残りの 2 回は新型コロナウイルスの感染拡大により中止となった。

(4) その他の団体との協働

八戸市の商業施設「八食センター」の親子向けイベント～こどもの日とハロウィン～において、わんぱく一歳の実施要請を受け、実施した。

4. わんぱく一歳の活動開始時の振り返り

今年度、第 1 回目のわんぱく一歳を、八食センターからの依頼を受けて、こどもの日に実施した。

その実施直後の講義時に、差波ゼミ 2 年生によって、KJ 法によりディスカッションを実施した。

「自分たちなりにできたこと」、「実際にやってみて気づいたこと」「地域との関わりについて」という 3 点で話し合った。

「自分たちができたこと」

1 年間、保育や幼児教育について学んできたことをもとに、自分たちの実際の子どもたちや保護者との関わりにおいて、ポジティブに捉えてほしいと願い、このテーマを設定した。

「実際にやってみて気づいたこと」

机上の理論だけではなく、実際に人と関わることによって、また活動を展開することで得られる様々な気づきを、素直に表し共有できるようにという意図で、このテーマを設定した。

「地域との関わりについて」

幼稚園教育要領や保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領などに掲げられてある、地域社会との連携や協働の意義について、実際の実践の中で学生たちがどのように感じているか、また

学びとして得ているものがあるかを探るために、このテーマを設定した。

いずれも、図式化し以下に示した。

図1 自分たちができたこと（開始時）

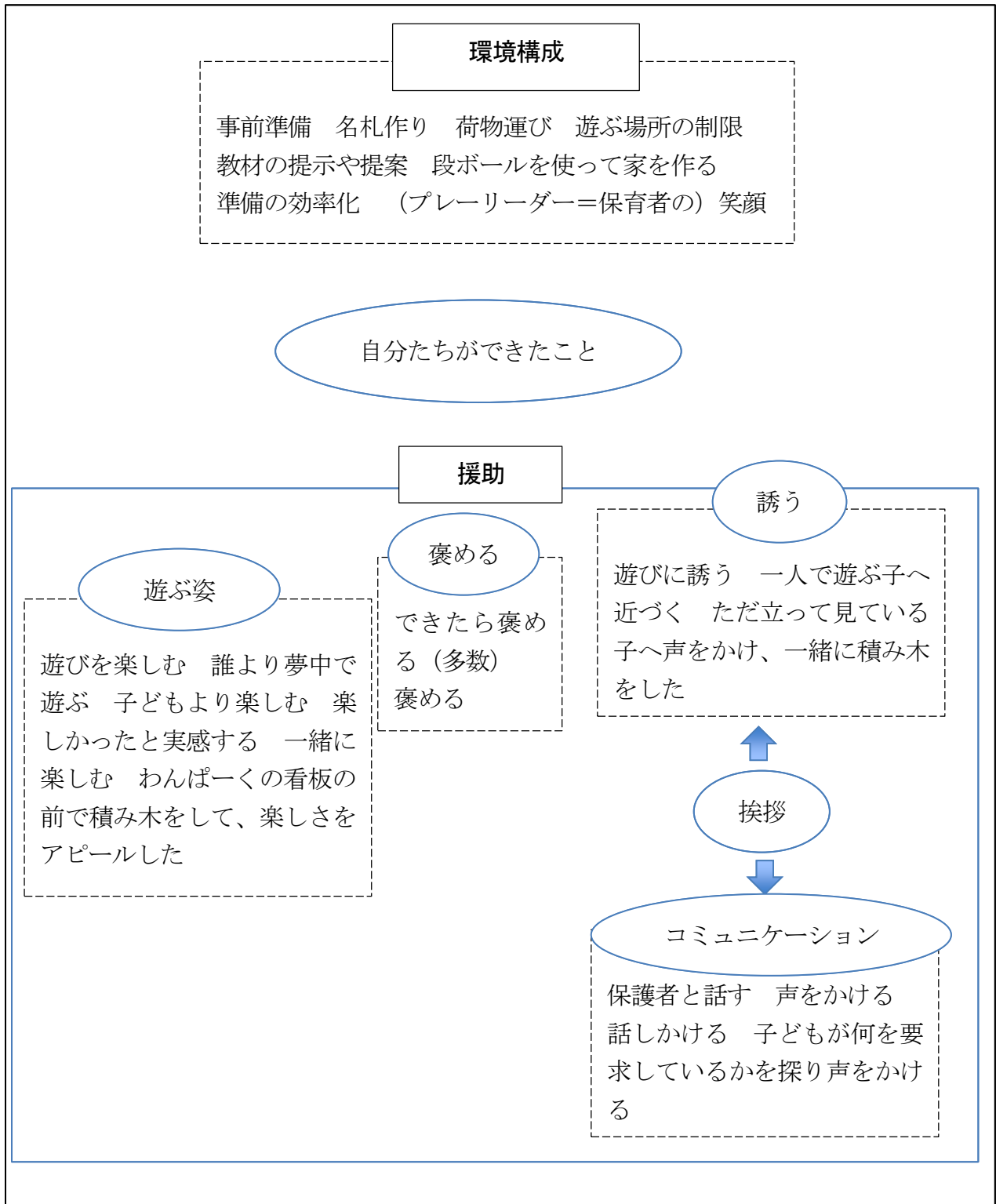


図2 実際にやってみて気づいたこと (開始時)

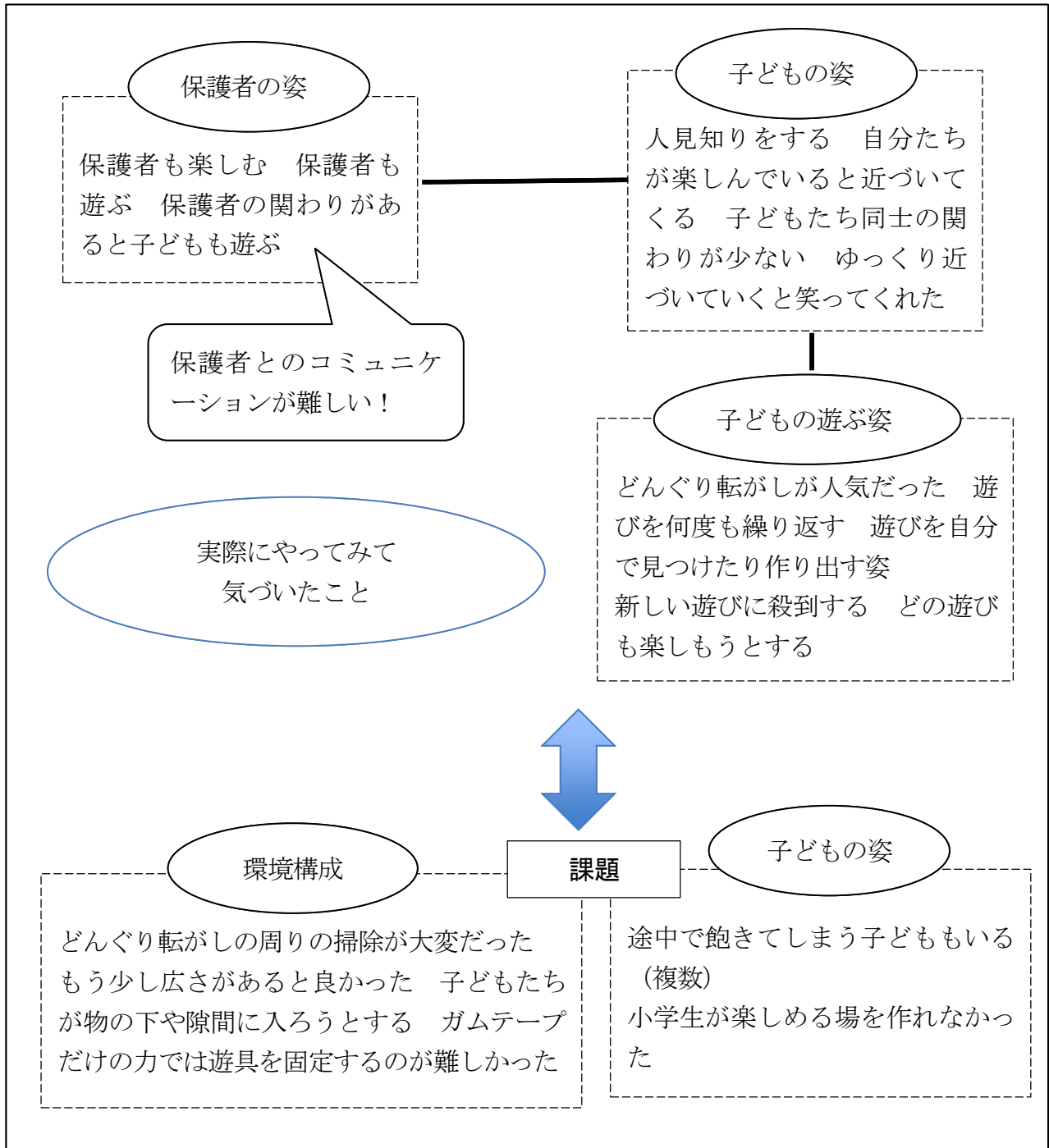
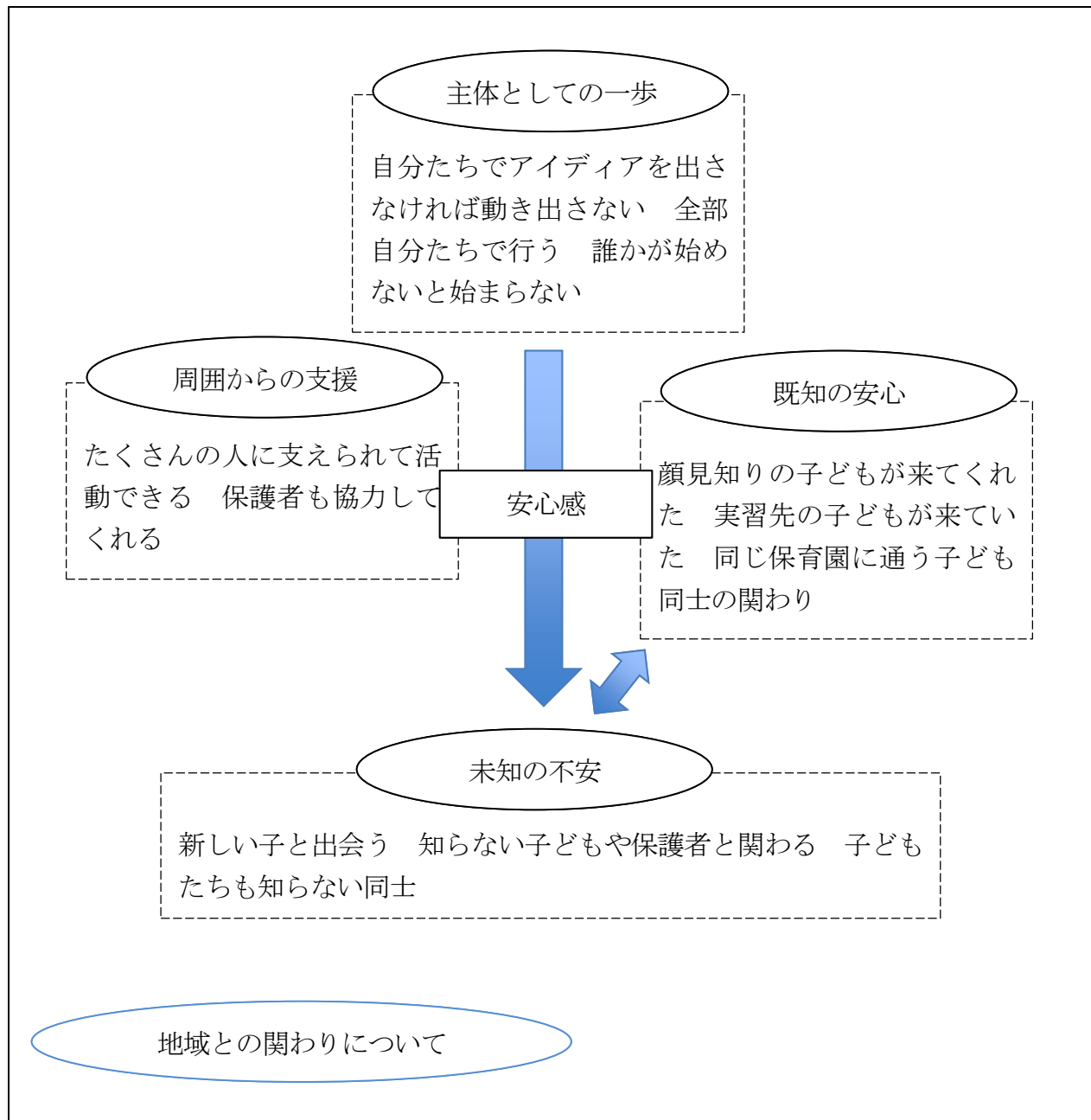


図3 地域との関わりについて（開始時）



考察

(1) 学んできたこととの整合性

保育士養成校での1年間の学びを通して、保育者としてどのように子どもたちと関わるべきかを理解し、それをもって子どもたちと関わることで実感していることがうかがえる。図1の、環境構成の重要性や、遊びを楽しむ姿を見せるモデルとしての役割などがそれである。自分たちが意図してそうした行動をすることで、子どもたちと関わる際の手応えを感じていたのではないかと。

一方で、図1～図3に共通して出てくる言葉が、

「保護者」である。学生たちがそれまで経験して来た実習においては、保護者と関わる機会はほとんど無かった。それゆえ、保護者と実際に向き合い、関わる場面が生じた時に、話しかけるタイミングや、その行動に移るための勇気などに難しさを感じていたようだ。また、それまでの講義等においても、家庭との連携の重要性や、保護者を支援することの重要性について繰り返し聴いてきていることにより、こうした意識が働くとも言える。その重要性を認識しているからこそ、課題意識であるとも言える。

(2) 積極性

学生たちが子どもたちの姿について、的確に捉えると共に、それに沿って自分たちから積極的に関わろうとする・していた姿勢が推察される。

図1にあるように、声を掛ける、遊びに誘う、褒めるなどの関わりをしている。また、その関わりを通して、一人ひとりの幼児との距離感（自分が知っている幼児に対しては安心し、知らない幼児に対しては少し不安を持って接する～図3）にも気づいている。学生たちは、こうして積極的に子どもたちと関わろうとする中で、体感的に一人一人の子どもへの適切な関わり方を得ていると言える。

また、こうした子どもたちへの適切な関わりを目指す中で、遊びの環境への働きかけ＝環境の再構成に対しても積極的に取り組もうとする姿勢が見られる。その環境の課題（図2）に気付いたり、そもそも子どもたちの「遊びたい」という思いを引き出すために事前準備の重要性（図1）も認識したりしている。実際の場面では、こうした気付きを、しっかりと自分たちの行動に移し、子どもたちの遊びがより充実するように支えていた。

図3の「主体としての一歩」にあるように、自分たちがその遊び場を展開する主体者であることも、こうした積極性の発揮につながっていると考える。

(3) 有意義性の気付き

ある学生から、地域との関わりについてのディスカッションの中で、異年齢の子ども同士の関わりについて意見が出された。（図3）この意見は、一匹狼（KJ法で、他のどのカテゴリーにも属さない意見）ではあるが、貴重な意見である。

前述した幼稚園教育要領等でも、異年齢児との交流の重要性が言われている。近年、社会の状況が刻々と変化する中で、兄弟数の減少や地域コミュニティでの子ども同士の交流の減少など、異年齢の子ども同士の交流が少なくなっている。それは、子どもたちが人と関わる面白さや難しさを直接経験する機会がなくなりつつあるということである。

子どもたちが成長していく中で、人と関わる力や協同性の育ちなどに少なからず影響を与えるものだ

ろう。また、プレーパークの先駆者である大村¹⁾は、「生活空間のなかでの、親子、夫婦、先生と生徒といった、限られたタイトな人間関係ではなく、もっと緩やかで多様な人と人のつながりが、遊び場では生まれやすい。（中略）いろいろな人と出会い、社会の構成員の一人であることがそれとなく分かる機会ともなり得る。」と述べる。こうした緩やかな人間関係は、異年齢の関係性の方が持ちやすいのではないだろうか。

この異年齢の子ども同士の関係性の意義、有意義性についても、学生は何となくかもしれないが感じ取っていたと言える。

5. わんぱくの一の活動と地域の子育て支援団体との協働の全活動終了後の振り返り

この、第1回目のわんぱく一の活動の実施と振り返りの後、前述した3の(1)、(2)、(3)、(4)の活動を、6月～12月にかけて展開した。

それらの活動を終え、再度、同じ質問項目で、KJ法によってディスカッションを行った。同様に、図式化し、以下図4～図6にまとめた。

図4 自分たちができたこと（全活動終了後）

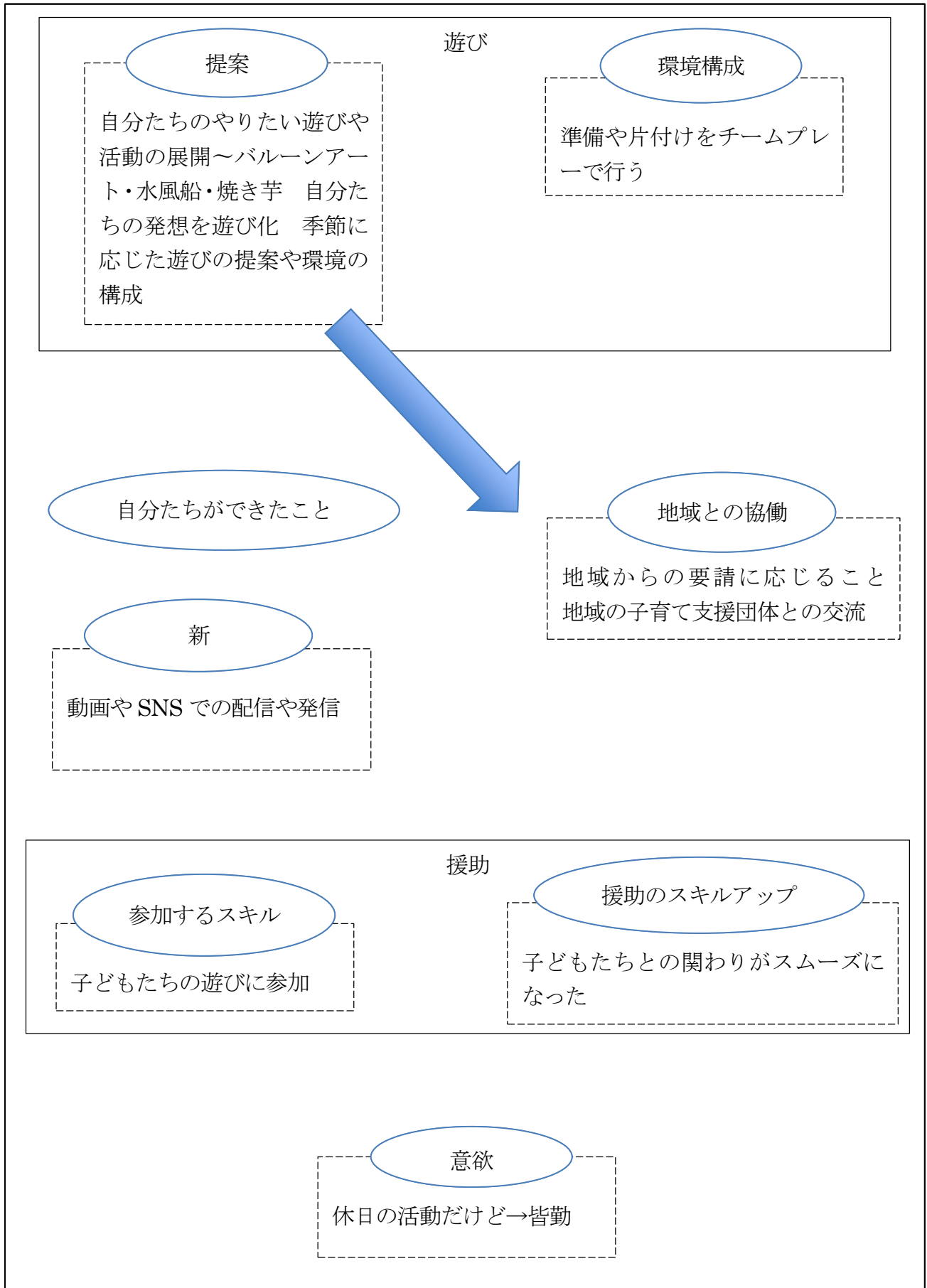


図5 実際にやってみて気付いたこと（全活動終了後）

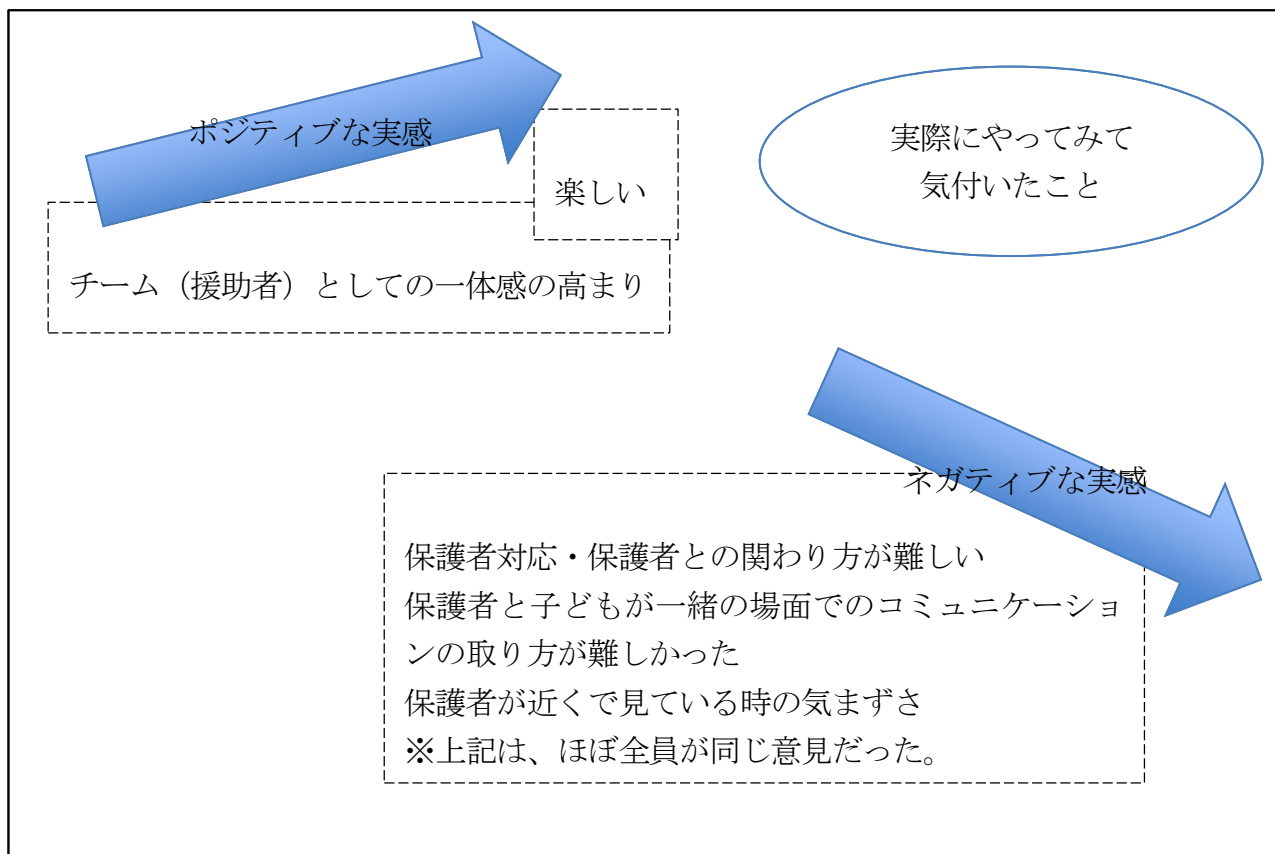
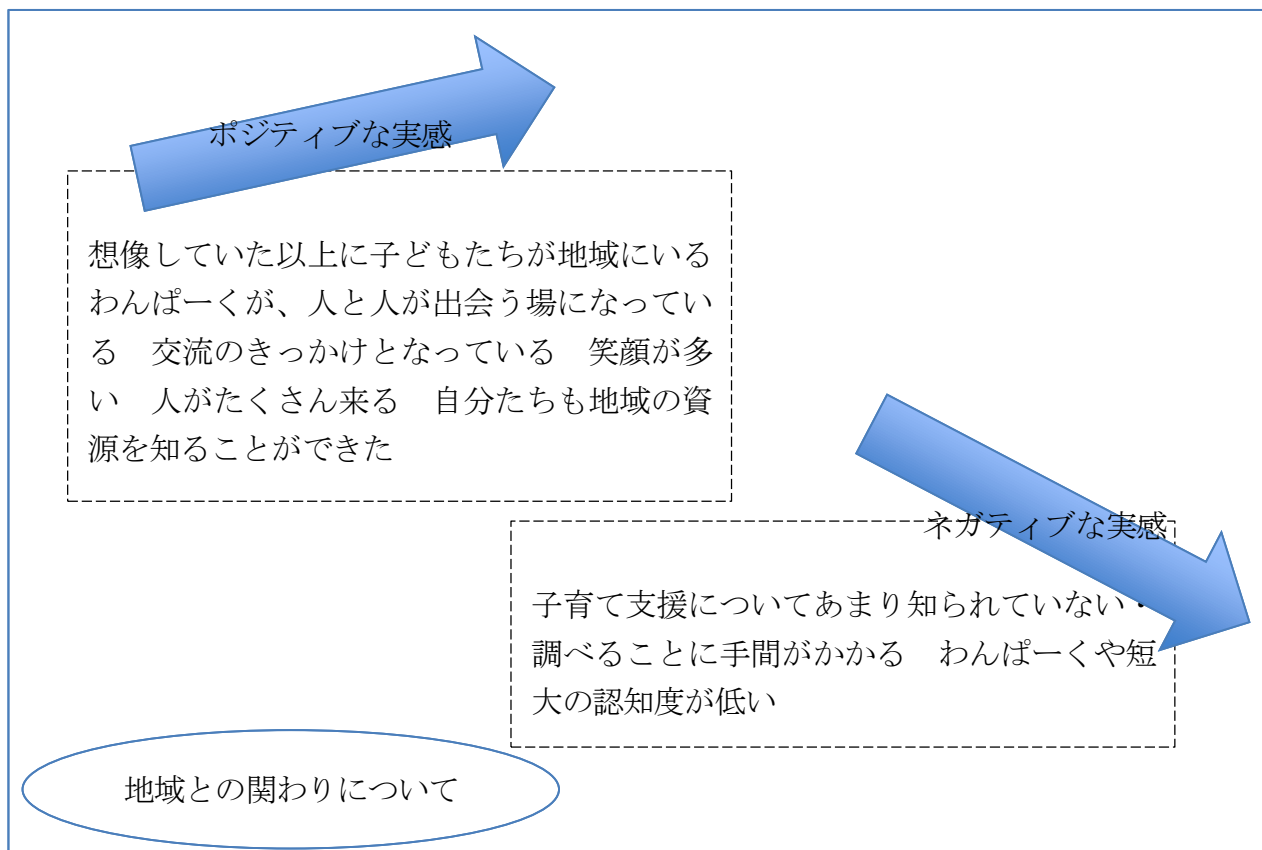


図6 地域との関わりについて（全活動終了後）



考察

(1) 保育者を目指す学生だからできること

このディスカッションを行った時点で、学生たちは各実習の全てを終えている。その実習で学んできた様々なスキルを、わんぱーくの活動や子育て支援活動の中で、より意識的に発揮して、その有用性も認識している。

例えば、図4における遊びの提案である。季節に応じた遊びや、子どもたちが興味を持ちそうな遊びを考えて環境を構成することで、子どもたちの遊びが充実する。また、こうして子どもたちの遊びが充実することで、地域が要請していることを満たしたり、地域の子育て支援団体との協働が成立したりすることを理解している。

さらに、子どもたちとの関わりにおいても、子どもたちの遊びに積極的に入っていくことや、実際の援助の幅が広がったと実感している。このことは、指導担当教員である筆者の目から見ても、明確に実習前との違いが感じられるところである。実習を終えてからは、こうした具体的な関わりはもとより、援助者同士のコミュニケーションや協力する姿などがより多く見られるようになる。(図5参照) こうしたことを自覚して行動に移すことができる、またその価値や成果を感じられる、ということも、保育者を目指す学生だからできることだと考える。

(2) 地域との協働による新たな視点

地域社会との連携の重要性が幼稚園教育要領等で述べられていることは前述した。それが、保育者に十分認識され、それぞれの園で十分に実践されるためには、保育者自身がその意義を実感することが求められる。

図6では、わんぱーくという遊び場にたくさんの子どもたちが来てくれたこと、大人もたくさん来てくれたこと、さらに来てくれた人たち同士の交流が生まれたことなどを、学生たちは実際に体験した。またこのことに価値を感じている。つまり、こうしたニーズがあり、それに対して保育者は積極的に展開する必要性もあると感じているのではないだろうか。保育者自らが、地域と連携することの意義や価

値を認識することで、自身の保育実践に取り入れようとするだろうし、子どもの育ちのために地域の環境を活用するだろう。

何よりも保育者が、地域環境が子どもたちの育ちに大きな影響を与えること、またそれによって保護者が子どもの育ちに安心し、最終的に保護者の子育てを支えることとなる。子育て支援につながっていく有益性を理解することが重要である。

(3) より深く実感された、保護者との関わり難しさ

図5のネガティブな気づきは、ほぼ全ての学生が挙げた意見である。つまり、保護者との関わりに困難さを感じているのである。

養成段階における実習では、前述した通り保護者と子どもの姿について会話ややり取りをしたり、保護者を支援したりする場面はほぼ無い。実習で、指導担当の保育者が保護者と関わる場面は目にする。それもその保育者と保護者との信頼関係が構築された段階での場面であるため、初めて出会った保護者とのように接するか、どのように支援するか、という戸惑いは当然と言えよう。

ただ、こうした「難しさ」を感じているということは、このわんぱーくの活動の中で、幾度となく保護者と向き合い、関わろうとしてきたからこそである。この活動を通して実感された保護者との関わりや保護者への支援の難しさを踏まえ、どのように保育者としてアプローチしていくべきかを考えるきっかけとなっただろう。

(4) 情報を発信すること

図4において、動画配信が自分たちでもできることや、SNSでの発信が有効であることにも気づいている。今後の幼児教育や保育においても、その効果が期待される場所である。

また、こうしたコミュニケーションツールを活用することで、子育て支援を必要としている人がスムーズに支援を受けられるようになること、子どもたちが楽しむことができる場や機会を知るようになること、幼児教育や保育の意義につい

て知ることができるようになることなど、保育者として社会に知ってほしいことや考えてほしいことなども、学生たちは明確に捉えている。(図6)

6. 活動全体を通してのインタビュー

今年の活動の全体と、ディスカッションを振り返りながら、個別の考えについて年度最後のゼミナール講義時にインタビューを行った。

学生たちが、ディスカッションの中で挙げたことと、地域の子育て支援団体との協働について感じたことを主な話題とした。

(※インタビュー文中の下線部分は筆者による。)

<インタビュー～学生1～>

Q. 保護者対応の難しさを、気付きとして挙げたが、具体的にどのような場面で感じたか？

A. 子どもたちと遊ぶ際に、保護者に気がつかってしまう。保護者がそう言ってはいないけれども、子どもたちが走り回っている場面で、それを「よし」としているのか、「やめてほしい」と思っているのかについて気になってしまうなど、その基準がわからないからやりにくい(関わり方がわからない)。

Q. 地域の子育て支援団体と協働して感じたことはどのようなことか？

A. それぞれの団体の取組方に違いはあった。子どもたちの興味を高めるための工夫がそれぞれあり、それを感じた。子育てに関わる動画の配信も、直接的な子どもとの関わりはなかったが、実際に取り組む中で、その団体の目指すところや意図や主催者の思いがあると感じた。これまでは、こうした取組を知る機会が無く、地域で活動している人たちと出会うことも無かった。こうしたきっかけは必要だと思う。

<インタビュー～学生2～>

Q. 保護者と子どもとのコミュニケーションを取る力が身につくと感じたようだが、どのような場面を感じたか？

A. 保護者が一緒にいる場面で子どもに関わるの

で、保護者にも話しかけながら遊ぶ場面がどうしても生まれる。そこで実際にやり取りをすることで、自分なりに考えて話す機会が生まれた。

保護者も、この遊び場に参加するにあたって、どのようなスタンスで参加して来たら良いのかわからないように察せられた。その場面で、自分から声をかけて誘うこともできた。

Q. 地域の子育て支援団体と協働して感じたことはどのようなことか？

A. 八戸市内だけでも、子どもたちや保護者への支援をしようとする団体がこれだけの数あったことに素直に驚いた。子育てを支えようという理念を、特にそれを専門職としない人たちが持ち、具体的な活動として展開していることがすごいと感じた。

<インタビュー～学生3～>

Q. わんぱくでの活動でできたことは何か？

A. 子どもたちと遊びを展開することができた。子どもたちができないことを、私たちが支えてあげたり、きっかけを作ったりすることで遊びとして展開することができる、ということがわかった。

段ボールなどの素材で、私たち自身が遊びとして「家」を作ったり「ロボット」を作ったりすることで子どもたちが興味を持ち、その子たちなりの遊びへの入り方で入って来てくれると感じた。

2～3歳くらいの女の子が、ふらふら一つと私のそばにやってきた。その時に、私が段ボールで家を作り始め、台所や鍋などの形が定まってくると、その女の子の方から「何(の料理)を作りますか？」と声をかけて来てくれた。

Q. 地域の子育て支援団体と協働して感じたことはどのようなことか？

A. それぞれの団体の代表者が男性ばかりだったことに驚いた。なぜなのかはわからない。

こうした人たちがいて、こうした団体があることも初めて知る機会となり、新鮮だった。

<インタビュー～学生4～>

Q. わんぱーくの活動で気づいたことはどのようなことか？

A. この活動について、また、子育て支援をしている団体や活動についてあまり知られていない、ということを感じた。

興味がある人は、それほど知らせなくても知ろうとするが、あまり興味を向けられない人もいるのではないだろうか。そうした人たちに、自分たちのしている活動を知ってもらえるようにする方法を考える必要がある。

また、私たちのように、小さな団体がする子育て支援だと、「何をしているかわからない、理解できない」ということも生じるのではないだろうか。

この他に、自分としては、子どもたちとの関わり始める際の距離感や、その距離の詰め方を体験的に学ぶことができたと思う。子どもたちが遊びに入って来やすいタイミングで声をかけたり、子どもたちが遊びに自ら入ってくるまで焦らずに待つことができるようになったりした。保育実習や教育実習での経験も生きたと思っている。

考察

(1) 保護者と関わろうとする学生の意識

ディスカッションの考察でも挙げたが、遊びや活動の中での、「保護者との関わり」に難しさを感じる学生が多かった。

その原因は、直接的に参加保護者に何かを言われた、咎められた、などといった経験によるものではなく、学生1のコメントにあるように、「～と思っているのではないか。」といった学生側の思い込みを原因としている。

また、学生2も、「保護者にも話しかけながら遊ぶ場面がどうしても生まれる。」とコメントしているように、保護者となんとかコミュニケーションを取らなければならない、という思いがストレスにつながっていることも伺える。

学生たちは、これまでの短大での講義や実習の中で、家庭との連携の重要性や保護者を支援する保育

者としての専門性について、重ねて学んできた。その重要性は認識しつつ、まだまだその力が足りないということも実感として感じている。

(2) 幼児教育の基本の理解

なぜ冒険遊び場であるプレーパークが求められるのか？なぜ、子どもたちにとって遊びが重要なのか？幼稚園教育要領では、幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和の取れた発達の基礎を培う重要な学習である、ということが明記されているが、本当にそうなのだろうか。

学生は、援助者として、あるいはプレーリーダー（プレーパークにおける大人）として、子どもたちと関わり、一緒に遊ぶことに意義や価値を感じている。学生3のコメントでは、自分が援助したことによって、遊びの中で子どもたちの姿に変容があったこと、遊びが充実したことに嬉しさを感じていた。幼児教育においては、こうした変容を「育ち」として捉え、だからこそ教育として成立すると考えたい。

この、短大で学んできた様々な幼児教育や保育に関する理論と、保育実践や子どもの姿が重なり、理論の理解が深まることに喜びを感じる姿こそ、保育・幼児教育を学ぶ学生だからこそ、の姿である。

(3) 地域連携の面白さ

子どもや子育てを取り巻く環境や社会が刻々と変化し続ける今、地域の様々な機関や団体と連携をとりながら幼児教育・保育を展開することが目指されている。

その連携を取る第一歩は、地域のそうした機関や団体を知ることである。学生3、学生4が述べているように、「初めて知った。」「あまり知られていない。」機関や団体が実際はたくさんあるのではないだろうか。

それを知るところから始め、そうした機関や団体と積極的に関係を構築していく必要がある。その際、動き出していくのは保育者であるべきだ。なぜなら、地域社会と連携し、共に教育活動を展開する、協働することで、子どもが育つからである。学

生たちも、そうした実感をこの取組を通して少なからず感じたのではないだろうか。地域社会と連携し、子どもが育つ、ということに、保育者としての面白みや充実感を学生たちなりに感じていると考える。

7. まとめ

U. ブロンフェンブレンナー²⁾は、仮説の一つとして、人間の発達には「多様な役割を占めている人々との相互作用を通して促進され、また絶えず広がる役割のレパートリーに参加することによって促進される。」と述べている。この、多様な役割を占める人々が存在する場が、地域社会である。

だからこそ、本学においては、地域をフィールドとした教育研究活動を展開することを重視し、そこで得る学びによって、保育者に向かう素地を育んでいるのである。学生たちは、地域社会で出会う様々な人と触れ合い、子どもたちと出会って関わり合うことで様々なことに気付き、考え、行動してきた。その繰り返しの中で、あるいは体験や経験を通して実感することにこそ大きな価値や学びがあるだろう。それは、これまで述べてきたように、全てがポジティブな心地よいものではない。少し苦しく、難しい課題として得たものもある。

こうして、学生たちは、自らが学び成長した経験をもとに、子どもたちや保護者と向き合っていく際に、今度は教育・保育実践者として、それぞれの育ちに力を発揮していくだろう。

また、学生たちにとって（短大教員である私にとっても）こうした取組を通して出会ってきた、地域の子育て支援の団体や人とのつながりは、時間や場所の区切りで終わるものではない。このつながりが、今後の保育者としての強みにもなるだろうし、よりその連携や協働の幅やつながりを広げていく意識にもつながる。そして、このことによって、地域の幼児教育や保育の質が高まり、子どもや子育てをする保護者をしっかりと支える体制が作り上げられていく。

8. 付記

- ・令和3年度の、筆者のゼミナールにおける地域での活動は、八戸市より、「令和3年度 八戸市学生まちづくり助成金」を拝受して展開した。
- ・今年度の地域での活動の様子について、筆者のゼミナールに所属する2年生4名が、「令和3年度 全国保育士養成セミナー 第13分科会」において、地域での子育て支援団体との協働について、話題提供者として発表した。

9. 引用文献・参考文献

<引用文献>

1) 大村璋子 (2000年) “自分の責任で自由に遊ぶ” 遊び場作りハンドブック

2) U. ブロンフェンブレンナー (1996年) 人間発達の生態学

<参考文献>

- ・文部科学省 (2018年) 幼稚園教育要領解説
- ・門脇厚司 (1999年) 子どもの社会力
- ・武田信子 (2021年) やりすぎ教育

執筆者紹介 (所属)

差波直樹 八戸学院大学短期大学部
幼児保育学科 准教授